

茨城大学学生広報誌

C-mail

2017 年度

春 / 夏

No. 217



特集

あなたにキャッチコピーはありますか

【自分の芯を持つ19人の茨大生】

C-mail 2 1 7 号



あなたにキャッチコピーはありますか

- | | | |
|----|---------------|----------------------|
| 4 | 在学中に起業した人 | 「価値観を壊すことで新しい自分と出会う」 |
| 6 | アーティスト | 「変わらないことは死ぬことより恐ろしい」 |
| 8 | 勉強が趣味の物理女子 | 「高校と大学の勉強は違う」 |
| 10 | 8年間で学した人 | 「普通に過ごすことだけが正解ではない」 |
| 12 | +αで学ぶ教育学部生 | 「『なりたい』に向き合ってみよう」 |
| 13 | 学生プログラマー | 「大学だけが学びの場ではない」 |
| 14 | 0単位の体操部長 | 「失敗から学ぶ」 |
| 15 | タガメの専門家 | 「好きを貫け」 |
| 16 | 役者 | 「絶望したからこそできることがある」 |
| 17 | 写真家 | 「自分の感覚を信じる」 |
| 18 | 劇団創設者 | 「やってみたいという衝動を大切に」 |
| 19 | 車椅子バスセサークル創設者 | 「しぶとさを持つ」 |
| 20 | 撮り鉄 | 「外に出ないと分からないことがある」 |
| 21 | Xジェンダー | 「『型』はひとつじゃない」 |
| 22 | コスプレイヤー | 「他人と違うことを恐れない」 |
| 23 | ファッションista | 「自分自身をデザインする」 |
| 24 | 学生パイロット | 「夢を叶える勇気を持つ」 |
| 25 | 同棲カップル | 「よきパートナーを見つけよう」 |
| 26 | 遺伝子疾患「アルビノ」 | 「己と向き合う」 |

連載企画

- | | |
|----|---------------------|
| 28 | マイゼミ |
| 30 | マイフェバ |
| 32 | ライフプレイス |
| 34 | ファッションスナップ |
| 36 | いばだいめし・学生支援課からのお知らせ |
| 38 | 編集後記 |

自分はどういう人間か
大学生活をどう過ごしたいか

まわりに流されない自分の芯
ちゃんと言葉で言えますか？

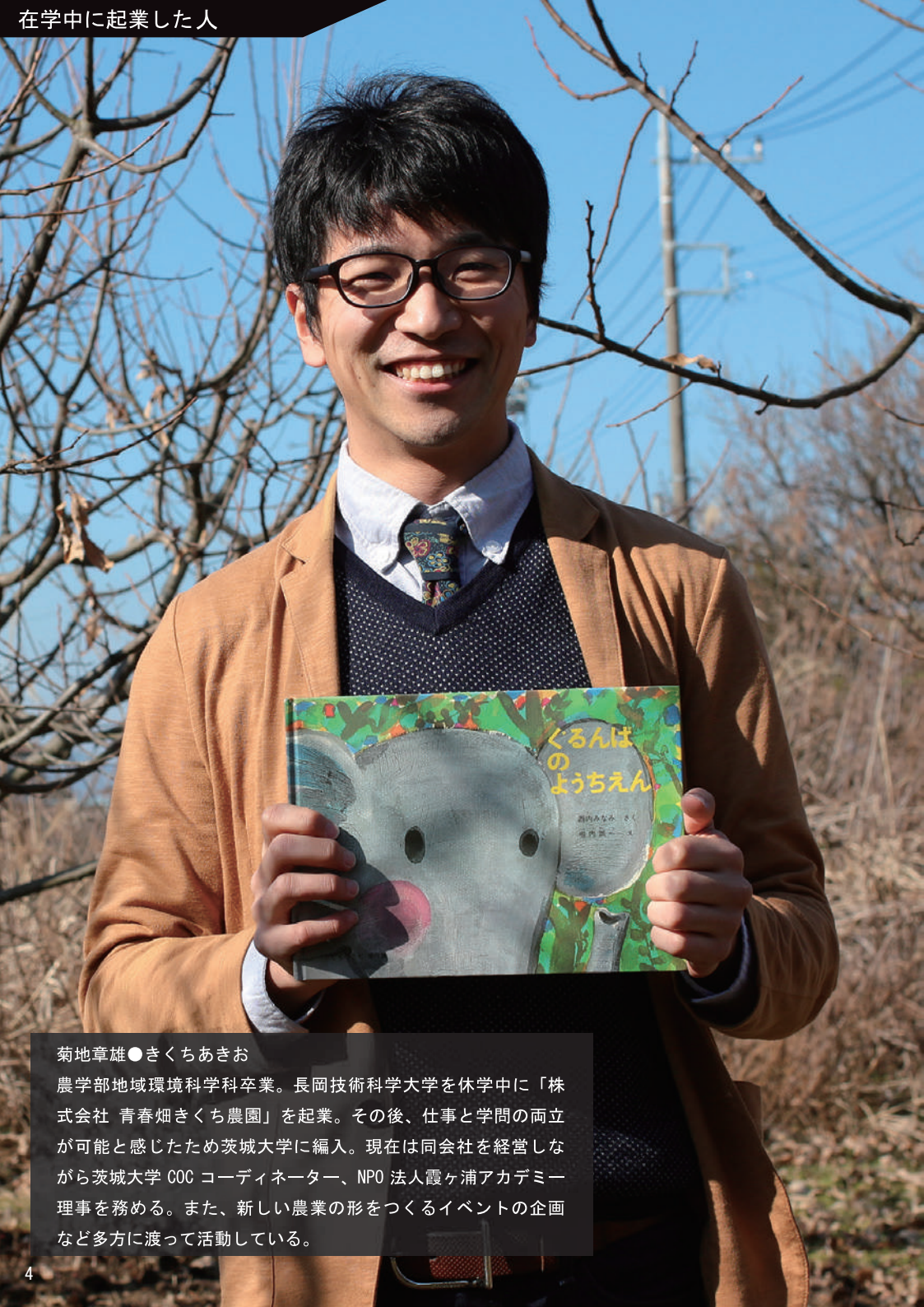
C-mail では今回、
「自分の芯」を言語化したものを
「キャッチコピー」と名づけました。

そして、「キャッチコピー」がある茨大生を探し
それに基づく経験や思いを取材しました。

ここに載っている19人のように

まわりに流されない自分の芯
ちゃんと言葉で言えますか？

茨城大学生の皆さんが、自分のことを見つめなおすきっかけになれば幸いです。



菊地章雄 ● きくち あきお

農学部地域環境科学科卒業。長岡技術科学大学を休学中に「株式会社 青春畑きくち農園」を起業。その後、仕事と学問の両立が可能と感じたため茨城大学に編入。現在は同会社を経営しながら茨城大学 COC コーディネーター、NPO 法人霞ヶ浦アカデミー理事を務める。また、新しい農業の形をつくるイベントの企画など多方面に渡って活動している。



▲「すみだ青空市ヤッチャバ」にて自作の栗を販売した。栗は比較的手間がかからないので育てやすい。



▲「日本ベトナム農村漁村交流会」の様子。日本企業で働くベトナム人と農業体験や、カヌー体験をした。



▲まちあるきプログラミング in 笠間市の様子。パソコンを使わずにまちの中に隠されたプログラミングを探し、世の中の仕組みを学ぶ。



▲霞ヶ浦アカデミーの活動。玉造小学校の児童100人と、環境学習を行った。

価値観を壊すことで新しい自分と出会う

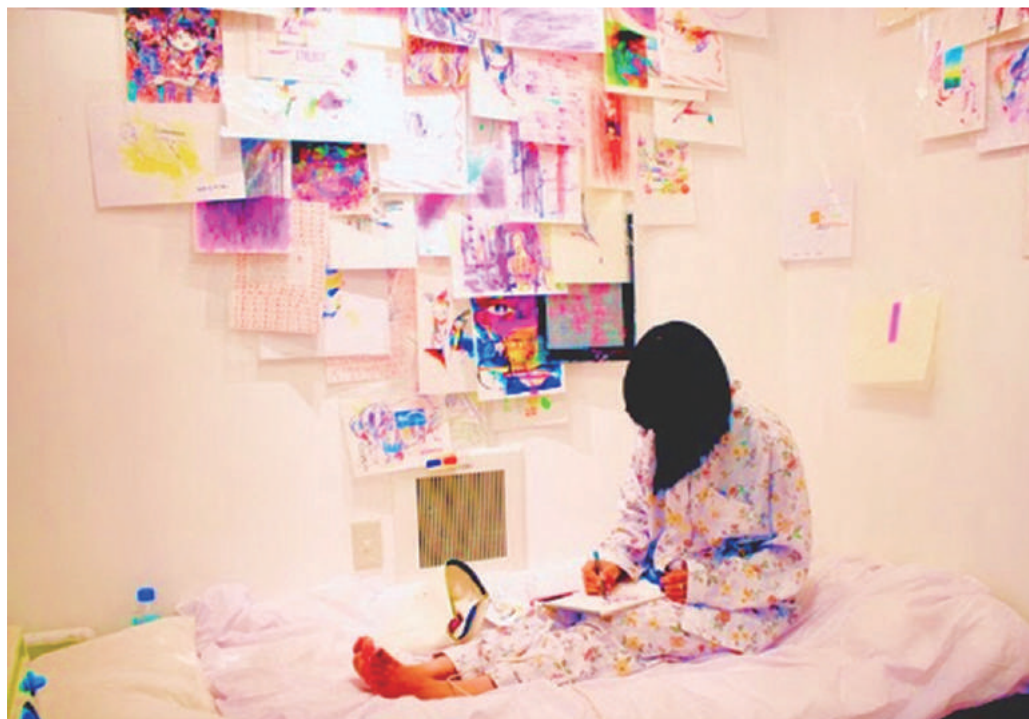
「価値観って偏見の塊だからどんどん壊した方がいい」と語る菊地さん。「価値観は子供のころから親や学校の教育によって作られてきたものであって、実は自分の考えとは違う。僕は東日本大震災で地域コミュニティの破壊を目の当たりにして、自分の価値観を大きく変えられた」。当時 23 歳だった菊地さんは、地域と密接に関わりたという思いから農業を始めた。

授業、バイト、サークル。お決まりの過ごし方ばかりで新しいことに挑戦しない人が多い中、「誘われたらなんでもやってみる」が、菊地さんのポリシー。「仙台へのひとり旅に向かう途中、福島でワークショップのスタッフをやらないかと知人に誘われた。そこで旅行の予定は崩れたけど引き受けた。断るよりもやってみた方が楽しかったりする」。その経験から菊地さんは「旅をするように生きる」という目標を立てた。それは、「人生を旅にたとえ、予定を決めすぎずに生きる。予想もしない経験や出会いの中でいつの間にか自分の価値観が変わっていく」というものだ。予定通りに動くことよりも楽しそうな方を選ぶ、それが菊地さんの人生を豊かにしていく。

そんな菊地さんの悩みは「周囲の人に自分の職業、どんな人かを説明するのが難しい」ということ。さまざまな肩書きを持つ菊地さんならではの悩みだ。ここでは菊地さんの仕事の形のひとつである、楽しいイベントを企画して実行することについて紹介したい。菊地さんが考案した「はたけとえほん」は、大人や子供が好きな絵本を畑に持ち寄ってみんなで読む、というイベントだ。左ページで菊地さんが手にしているのはお気に入りの一冊「ぐるんぱのようちえん」。おなじみの絵本も青空の下で読むと違って見える。絵本好きな菊地さんいわく、「絵本の魅力は、言葉が少ないから想像を膨らませやすいところ。内容は子供向けだけど仕事や就活の悩みにも当てはめることができる」。もう子供ではないけれど、大人にもなりきれない私たち大学生がもう一度絵本を手に取りたくなる一言だ。

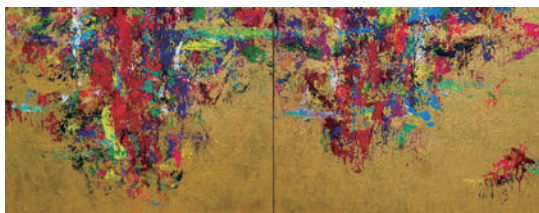
「人から見たら、僕は遊んでいるように見えるかもしれない。でもお金をもらうことだけが仕事じゃないと思っている」。仕事という概念は人それぞれだが、菊地さんのように楽しそうに仕事をする大人に憧れる。

「自分がどんな人間か短い言葉で説明するために、自分のことを振り返る時間はとても大事。自分を振り返る方法の一つとしてキャッチコピーを考えることが自分は何者なのか？という問いの答えを導ききっかけになると思うから」と、菊地さんは今回の本誌のテーマにぴったりな言葉をくれた。



▲アートをより身近なものへ。ベッドを持ち込み、寝ながら客を待ち構えるのが彼女の展示スタイルだ。

▼あめのいちさんの作品。



学校の先生や親の言うとおりにして流された結果、自分を見失う。

——誰もが心当たりのある経験だと思う。

「流されていい子に生きてきたことに後悔しているから、自分を取り戻すために自己表現しているんですね」そう語るのはあめのいち（作家名）さん。

彼女の作品にはしばしば『死』が表現される。一年前、彼女は学業に熱中するあまり体調を崩し、それに追い討ちをかけるように母が大病を患った。それから一年『死』が身近なことであると体感した彼女は、自身の葛藤をキャンバスに描き続けたという。

取材でたびたび口にしていたのが「変わらなければ」「いつ死ぬか分からない」という言葉だ。なに、ボサッとしてるんだ！なんとなく日々を過ごしている人がいたら、今すぐ肩を揺さぶりに行きたいよ。生命の危機を感じてくれ！と続く。

「でも、自己表現で自分を変えられたっていうのは、特技があったからこそできたことですね。自分を変えたくても、何の取り柄もなかったら、どうすれば良いんですか」編集者が問うと、「無意識を信じろ、という心理学者の言葉があってですね…明確な目標はなくてもいいから、とにかく自分の惹かれることをやっていったらおのずとなりた自分になれると思うんです」との言葉をくれた。

「止まっていることは心地良いです。でも、新しいことをするためには心地良い今の世界を壊すことも必要。少なくとも私は、「いい子」のまま死ぬのが嫌だから変わることを決めました。自分にとっては、変わらないことは死ぬことより恐ろしいですね」。

『死』に感化された彼女は、自分自身のことだけではなく、アートのあり方さえも変えようとしている。左ページ上段は東京で行われた個展の様子。作家の自宅を模した空間は、アートになじみのない人もリラックスして楽しめる配慮がされていた。

「タイが好きなんですけど、タイって仏教や死というのが生活の一部として認識されているんですね。ギャルみたいな女の人が、通りかかった礼拝場でいきなり姿勢を正して祈りはじめたときはビックリしたな。棺桶も派手だし、全体的に明るい。日本では少しとつぎにくくて静かなイメージなのになぜ？それって、アートのイメージ操作が加わっているからなのかと。日本と同じ仏教でも、伝え方を変えれば身近なものになる」。

芸術は、それに触れる機会のない者にとって少し近寄りがたい世界だ。だが、タイの仏教のように伝え方を「変えて」いけば、きっと芸術は開かれたものとなる。知識人だけではなく、多くの人が関われるコンテンツへと、アートを身近に、死を身近に。

「いつ死ぬか分からない」あめのいちさんの表現活動はタイの仏教のように身近な伝え方で、見る者に死の存在を訴えかけているようだった。

あめのいち（広瀬玲菜）●教育学部情報文化課程3年
アーティスト。2016年8月個展「ドローイング展『此岸@マイルーム』」など。



変わらないことは 死ぬことより恐ろしい





平山穂香●ひらやまほのか

理学部理学科物理学コース1年。趣味は勉強と読書。物理をこよなく愛している。

高校と大学の勉強は違う

「大学での物理の勉強は楽しくて仕方ないです」。平山さんのこの言葉に驚いた。
彼女のように、勉強が楽しいと思ったことがある人は少ないのではないだろうか。

そんな彼女にも、勉強することが苦しいと思っていた時期があった。

それは高校生のときだ。いかに点数を取るかが鍵となる受験。当時受験生であった平山さんは、結果にだけ焦点を当て、点数を重視する勉強に納得していなかった。ある化学の時間。教科書を読めば、実験の仕方からどんな結果が出るか、細かく書いてある。でもその結果にたどり着くまでの過程は書かれていない。そこを教師に聞きに行けばもちろん教えてくれる。だがそのときに、「でも、入試には出ないから覚えなくていいよ」と必ず言われた。この教師のひとつに彼女はもはやもやしていた。

「こんなの化学じゃない、私のやりたい勉強じゃないと思いました。私のやりたいことと当時の勉強の間には決して埋まらない溝があり、それについていけなかったです」。

それでも好きな勉強を続けるためには今を耐えなければいけないと思い、自分の気持ちを抑えて受験勉強を続けた。

そんな苦しい受験を乗り越え、彼女はこの茨城大学に入学した。

初回のガイダンスのとき、教授らが学生に対して口を揃えて言ったそうだ。「暗記をするな。何がどうなるか、そのプロセスがわかっていればいい」。その言葉を聞いたとき、彼女は救われた。過程を重視する大学の勉強で、ようやく分かり合える、と心から喜んだという。

実際に大学で講義を受けると、やはり楽しかった。

それと同時に高校での勉強が大学でも活かされていることがわかり、それらは無駄ではなかったことも実感している。今彼女は、充実感に満ちた日々を送っている。これは高校時代には得られなかったものだった。

「大学で勉強ができてよかったと思っています」。平山さんは笑顔でこう言った。

勉強が好きだと思ったことがないのは、自分の好きなことを見つけれられていないからではないだろうか。

大学生になったのだから、もうこれまでの勉強にとらわれ続けてはいけない。



飯島敬一郎●いいじまけいいちろう

人文学部社会科学科卒業生。2005～2013年の8年間在学した。在学時はバドミントン部に所属。



普通に過ごすことだけが正解ではない

「入学したときは普通に4年で卒業して公務員になろうと思っていました」。

そんな飯島さんの人生を大きく変えたのが、失恋だった。「2年の時は猶予があったから3年、4年で頑張って単位を取れば卒業できると思っていました。でも、椅子に座っているだけで失恋の悲しみがこみあげてきて授業に行かなくなりました。家にいても親や教授から電話がかかってくるのが怖かったのを覚えています」と、当時の心境を語る。

そのプレッシャーや、留年に対する焦燥感を忘れさせてくれたのがバドミントンだ。

「精神的なストレスは肉体的なストレスを与えれば解消する」という体育教師の言葉を胸に体を鍛えた。普段の練習だけではもの足りず、青春18きっぷを使ってたくさんの地方大会にも出場した。

「バドミントンはコミュニケーションツールのようなものだと思います。知らない人とも競技を通してすぐに仲良くなれる。年代や職種の違う人たちとの出会いも面白いです。留年中は周りの学生に白い目で見られているんじゃないかと不安に感じたこともありましたが、でも、バドミントンを通じて出会った人たちはもつというんな経験をしていたんです。その人たちから普通に過ごすことだけが正しいわけじゃないと教わって以来、周りの目があまり気にならなくなりました」。

同年代の人としか交流しないことで自分の視野が狭まることを懸念している飯島さんは、今も高校生にバドミントンを教えたり、クラブチームの年上の人と話したりして刺激を受けているようだ。

飯島さんは茨大生に向けてこう語る。「閉鎖的な雰囲気は良くないと早く気づいてほしいです。大学生活が始まった直後はなんでも新鮮さを感じるけど、次の新しい経験や出会いを求めようとする子が少ないと感じます。茨大の後輩は、大会や社会人クラブの練習に声をかけても参加しない。新しい空間に飛び込むのが怖いのかな。それは僕が授業に出るのが怖かったのと似ているのかもしれない。自分がよく知らない空間に行くのが不安だけで、行っちゃえば慣れるし経験になる」。8年間の大学生活でバドミントンに熱中し、そこから自分の視野を広めることの大切さを学んだ飯島さん。たくさんの人との交流で考え方も大きく変わったという。茨大で過ごす数年が今後の自分をつくる大事な時間だと再確認した。

飯島さんの8年間

- ☐ 1年目 真面目に授業を受ける。
- ☐ 2年目の冬 高校時代から付き合っていた彼女に振られる。
その後約1年間、図書館と部活を行き来する。
- ☐ 4年目、5年目 徐々に単位を取り始める。
- ☐ 6年目 東京の不動産屋で住み込みのバイトを始める。
- ☐ 7年目、8年目 卒論を書き、茨城大学を卒業。

サークルでの活動を通じて彼の中でのなりたい先生像が変化した。「はじめは、子供に好かれる先生になりたいって思っていたんですね」と言う砂見さん。「楽しくて面白い先生」、「子供のことを思いやれる先生」、になりたい先生像をそのような抽象的な言葉で表現する人は筆者の周りにもいる。

教育学部なのだから教育について触れておきたい、砂見さんもそんな漠然とした気持ちで教育実践サークル「千の星」に入ったという。

「けれど、子供と楽しく過ごすことばかりで、漢字や計算、跳び箱が出来ないままになってしまうのは、それは教師として無責任なのかなって。だから、今なりたいのは『できなかったことをできるようにさせてあげられる』先生ですね」。

学校は第一に子供が成長するための場である。そのため自分がどのような教師になるかという視点には、子供の成長にどのように関与するかという視点が欠けてはならない。「千の星」では大学の授業ではなかなか経験できない、子供の反応を想定した模擬授業や現職の先生に

よるフィードバックが行われている。「でも結局、大学生でやってることなんてまだ『ごっこ』です。もしかすると私たちが4年間で学んだことは、現場に出れば半年くらいで得られるものかもしれない」。砂見さんの姿勢はあくまで謙虚だ。「でも、新卒教師だって子供たちにとっては立派な『先生』だから。子供たちの前にゼロの状態で立ちたくない」。

なってみないとわからないとか、できないというのはただの言い訳に過ぎない。自分のなりたい先生像に向かって砂見さんはとことん真摯だ。

「先生」から様々なことを教えられ、時には叱られ、時には反発して、子供は成長していく。「先生」が告げた一言や、行動が、ひょっとしたらその子の一部になるかもしれない。そのことを「先生」には忘れて欲しくない。「子供が好きだから一緒に楽しく遊びたい」。それだけの理由で子供の人生に関与したくない。砂見さんの言葉からは、子供に正面から向き合うことを決めた意志が伝わってくる。

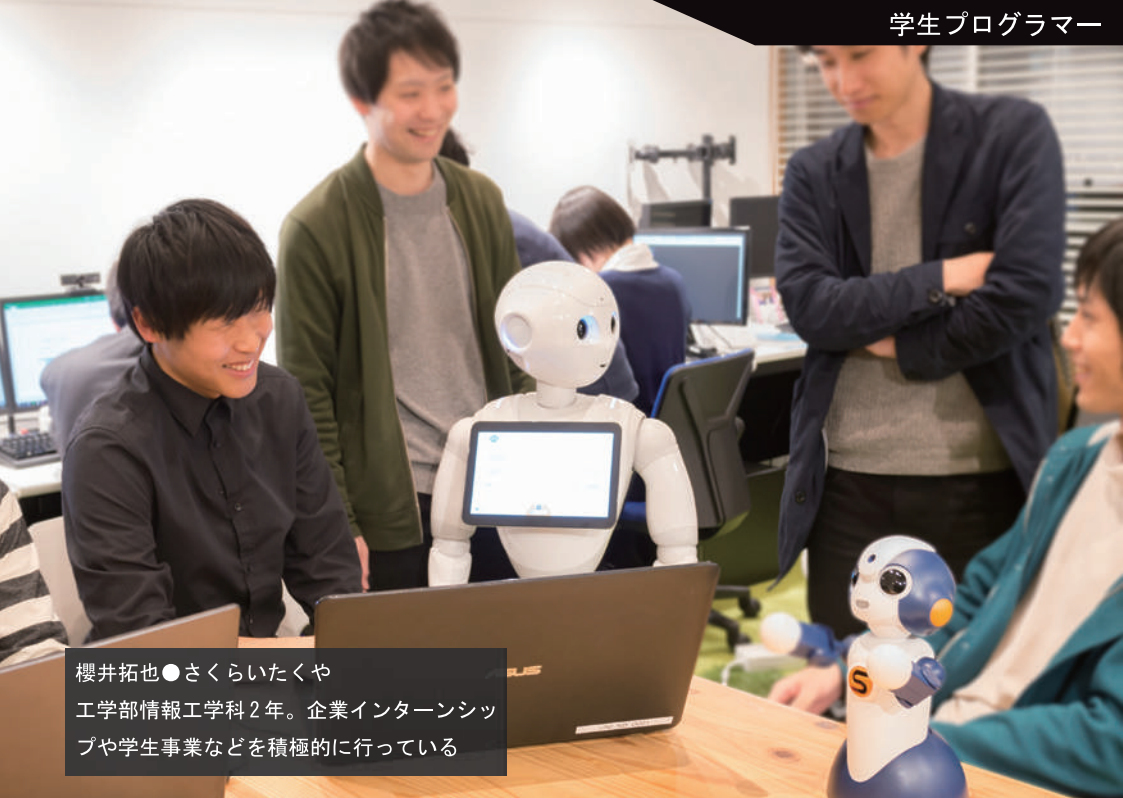
『なりたい』に向き合ってみよう



砂見琢馬●すなみたくま

教育学部学校教育教員養成課程社会選修3年。

教育実践サークル「千の星」代表



櫻井拓也 ● さくraitaky
工学部情報工学科2年。企業インターンシ
ップや学生事業などを積極的に行っている

☑ 大学だけが学びの場ではない

「大学で勉強していることがどう社会で役立つかわからなくて、1年の終わりに大学をやめようと思っていたんです」。就職を有利に進めるため、という目的で入学したものの、肝心な部分がはっきりとしないまま、自分の将来が限定されてしまうことが櫻井さんは嫌だったという。そこで自分が大学にいる意味を見出すために、彼はある行動に出た。「春休みを使って、社会人の方に電話やメールでアポ取りをして、その人たちがどういう生き方をしているのか、会社ではどういうことをしているのかを聞きに行ってきたんです」。

その中で自分の専攻する分野が社会で有用であると具体的な形で知ることができたという。また社会人との交流のなかで得たものは、興味があるものに対する答えだけでなかった。大学時代に身に着けておくべき能力、そのためにしておくべきこと……社会に出ている人の話を聞いているうちに、櫻井さんのなかに学校外で勉強をする必要があるという考えが芽生えた。

これまで3社のインターンシップに参加したほか、東

京の専門学校に通ったり、ITに興味がある人にプログラミング指導を行う学生事業へ手を伸ばしたりするなど、櫻井さんが『学び』とする場は幅広い。社会人との交流も依然として続けており、縁のあった方のもとで勉強することもあった。「学生でいるうちは失敗しても許されるし、責任さえ自分で負えば残るのはミスをしたという事実だけ。それに学生という身分を使えばいろいろな企業にもいけるし、勉強していれば会ってくれる社会人もいる。学生という立場はすごく強い」。また自分の興味のあることに対し、すぐその道の専門家である教授のもとに勉強しにいたり、質問したりできることも学生の強みであると語る。

「研究するため、就職を有利にするため、遊ぶため。大学に行く目的は人それぞれだし、間違いいはないし学生のうちにしかできないこともある」。大学生という身分はなにも大学内でしか通用しないものではない。櫻井さんは自身の目的を達成するため、大学内外で学び、そして楽しんでいる。

「自分だけの力で動こうとしたら、結果的に0単位になってしまいました」。

本特集を読み進めている読者は、「模範とすべき人」が多く並べられていることにお気づきだと思う。編集部でも当初はそのコンセプトで人選を揃える予定であった。「前期0単位の人がいる」その情報を聞いたとき編集部は驚いたが、自分と異なる経歴の人からは必ず学ぶことがある、そう考え取材を申し込んだ。

なぜ0単位になってしまったのですかと編集者が問うと、「1学期分休んだとしても困るのは自分だけ。授業に行こう行こうと思ってはいたんですけど、だんだんと休みがちになってしまい単位もとれませんでした。結果的に0単位になってしまったのは、自分だけで解決しようとしたから。自分の中に責任感や信念という軸がなかったからです」と答えてくれた。

自分に軸がないから、行動したくても何もできない。周りは動いているのに…。一現代の若者にありがちな悩みだと思う。それは「模範としたい人」と比べるあまり、信念がない自分をますます卑下し自分の殻に閉じこもってしまうことが原因なのではないだろうか。

0単位という経歴の一方で、体操競技部の部長を務めている樋掛さん。彼が取りまとめる体操競技部の取材に赴いた時、小さな社会の中で立ち回る樋掛さんを見た。

「行動したいと思っていても、実際に行動までは移せないという人はたくさんいる。それは僕と同じように、自分の力だけで解決しようと思っているからじゃないかな。そういう人は、行動する理由を自分じゃなくて外に作っちゃうのもあり。サークルやプロジェクト…小さな社会の中でポジションを確立していけば、投げ出したくなくても義務感が出てくるし、物事を最後までやり遂げるひとつの手段になると思うんだ。それを繰り返していけば、いつか自分のやりたいことや信念が見えてくるかもしれない」。

模範となる人物や高みを見て学ぶのは多くの教訓を得ることができる。同様に、失敗をした人物を見てもそこから学ぶことができる。自分一人で抱え込まず、周りの力を借りる。もっと肩の力を抜いて考えてよいのかもしれない。

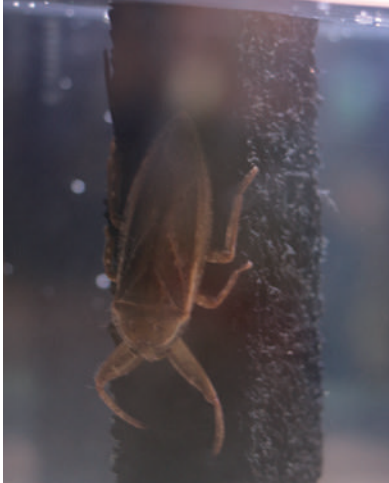
異色の経歴の持ち主は自分たちが気づかないようなことを教えてくれた。0単位というのは本来学生として叱責されるべき行為だが、自分たちが避けたいと思うような失敗をしたからこそ、見えている世界があるのかもしれない。

失敗から学ぶ

樋掛巧●ひかけたくみ

教育学部情報文化課程3年。3年次前期の取得単位数0。体操競技部長。





タガメを探している最中に
マムシに噛まれた指



✓ 好きを貫け

読者の皆さんはタガメという生物をご存じだろうか。タガメとはカメムシ科・コオイムシ科に分類される昆虫の一種で、日本最大の水生昆虫だ。過去において、バラエティで食されているところをよく目にしたが、現在は絶滅が心配される昆虫となっている。

「自分にとってタガメとは、腐れ縁ですね」。そう語る櫛井さんは、日本でも珍しい、タガメを専門的に研究をしている方だ。彼とタガメの出会いは小学校3年生の時。祖父の実家にザリガニ捕りに行った際、偶然タガメを捕獲した。飼ってみようと思いたが、すぐに死んでしまった。それから月日が流れ、高校3年生の時からタガメを本格的に飼いはじめたそうだ。そんなタガメとの生活10年目となる彼さえ、付き添っていくのは容易ではない。「タガメは肉食生物で、餌は金魚やカエルを食べます。そのため、

櫛井優志 ● くしいまさし

理学部理学科生物科学コース3年。国内で数少ないタガメの研究者

カエルは自分で捕りに行くのですが、金魚はホームセンター等で購入しています。夏場はタガメが活発的に活動するため、食費が僕よりもかかるんです」と苦笑いで語る。また、昨年の夏には、県北地域にてタガメを探している最中、マムシに指をかまれて病院に運ばれるという苦い経験もした。彼の指は今も変形したままだ。

そのような苦難をも乗り越えて行けるのは、彼が本当にタガメに対する「好き」を突き詰めているからであろう。「日本のタガメは目が鋭くて威厳があるのがいいですね。捕食の際も素早くてカッコいいです」と彼は同居人への愛を語る。「タガメやゲンゴロウの研究者になりたいです。そして、それらの生態や生息域環境を調査したいです。茨城周辺がタガメの生息域であるため、僕は地元を離れて茨城大学にきました」。彼はそう笑顔で話した。



絶対したからじゃ
でもないしがある

高橋知也 ● たかはし もとや

教育学部情報文化課程卒。演劇プロデュー
スユニット Moratorium Pants 所属。ロッ
クバンド・キュウソネコカミの MV や日本郵
政の CM に出演。

「飲み会で楽しく騒げる人はいいんだけど、すみっこで
ウーロン茶飲んで、ああどうしよう帰りたいって思っ
てる子の方がぼくは気になって。ぼくが助けたいのは、そ
んなすみっこで生きてるような人」。

みんなといのに楽しめない。そう感じてしまう人は
案外多いのかもしれない。高橋さんもその1人だ。自分
と同じような、孤独を感じる人に目を向けたい。そう思
うきっかけは、大切な人との別れだった。

「それまで軸にしていた大切な人がいなくなって、1度
すごく絶望したんだよ。頑張りどころがなくなって、気
づいたらなんにもできない。小説読んでも映画観ても何
も響かなくて死んでみたいだった」。

そこから這い上がろうと、自分の軸を模索する日々。
次第に、そんな孤独や絶望を味わったことから「誰かを
孤独から救い出せたら」と思うようになった。小説でも
映画でもなく、リアルタイムで生の表現ができる演劇に
こそ、その力がある。そう考えた高橋さんは、いま新し
いエンターテインメントを企てている。

「みんなが主役でドラマを作り出せる、役者もお客さん
もごちゃまぜの謎解きみたいなイベントをやりたいな」
たとえば舞台はマンションの一室。誕生日会の飾り付

けがされている中にイベントの参加者が入っていき、物
語をアドリブでつくっていくのだ。

「何人が進行役がいて、『今日なんで来たの?』『わか
んないけど誰かの誕生日会らしいんだよね』って参加者
同士が会話や行動でつながっていった、1通の手紙に隠
された謎を解明するとか。そうやって行動を誘導する仕
掛けをつくれたら、新しいコンテンツになる」。

どうして素人には難しいアドリブなんですか、と聞くと、
高橋さんはこう答えた。

「みんなに役割があって、物語の鍵となるシーンがあ
るって伝えたいんだよ」。

体験を通して、物語が終わった後も「自分の行動がど
こかで誰かを動かしている」という意識を持ち続けてほ
しいのだという。

「役としてではなくて、自分自身が物語を動かしたとい
う気持ちで外に出てもらって、その延長で生きられれ
ば、1つのエネルギーになるんじゃないかな」。

大切な人を失った。誰といてもなんだか寂しい。その
経験を経たことで、いま高橋さんは自分にできることを
見つけている。社会でうまくやっていけなくても、どん
底に落ちてても。同じ気持ちを持つ人の痛みになら、きっ
と寄り添うことはできる。

☑ 自分の感覚を信じる

「さっきからなんかあの花が気になるんだよねー」と、おもむろに立ち上がった瀬能さんは、話の合間に写真撮る。撮る。撮る。

「写真を撮ることは日常の延長。わざわざ探さなくても、撮りたいものが目に飛び込んできて『あ！見つけた。』って、毎日がその繰り返し。雨の日でも楽しいよ！楽しくて仕方ないんだよなあ」。

こんなに活き活きとした大人もいるんだな、というのが正直な印象だった。瀬能さんは大学時代から撮影を続けていたが、卒業後1年間は一般的な会社員だったという。写真は本業ではなくライフワークにするつもりだったが、憧れの写真家のアシスタント公募を見て思い立ち、応募と同時に退職した。

「結局アシスタントの選考には落ちたんだけどね(笑)」

そのままフリーランスの写真家として活動を開始。「動いた結果、望んだ形にはならなかったけどむしろ活動が広がってる」という言葉通り、転身以来CDジャケットの撮影や海外出展を精力的に行う。

「一番嬉しかったのは、東京カランコロンのボーカル・せんせいさんに撮影を頼まれたこと。ずっと好きなアーティストだったから、夢を越えた感じ。継続は大事だなんて」。

しかし、自分の選択とはいえ、フリーになるのは不安だったはず。なぜ自分に正直になれるのだろう。

「それは撮るときと同じように、自分の感覚を大事にしているから。同じ空間、同じカメラで、僕と誰かが同じ物を撮ったとしても、たぶんまったく違う写真ができる。ってことは、シャッター押す瞬間の選択が違うの。タイミングとか、立ち位置とか。それは感覚で成り立っているから、その感覚を、自分で大切に使う。だから写真も進路も、自分の感覚で選んだ末の結果には、何にしろ後悔はないかな」。

息をするように自然体で写真を撮る瀬能さんは、「写真の見方はほんとになんでもいい」と話す。「でも、気づけなかった視点を見つけてもらって、それが日常の中で生きてくれたら嬉しいなって。花の写真を見たあとに、いつもの花が輝いて見える…とか些細なことでもいいから。考え方を覚えてください、じゃなくて、気づき方が増えたら嬉しい。そんな感じなんだよね、いつも」。

それは、自分の感覚で撮った写真を、見る側の感覚にゆだねているということ。誰かの意図や世間の常識より、自分の感覚を信じてみることであれば、彼のようにシンプルに好きなことを楽しめそうな気がしてきた。

瀬能啓太●せのうけいた

教育学部情報文化課程卒。写真家。magentaや MARQUEE BEACH CLUB、日本松ひとみ（東京カランコロンのせんせいソロ活動）などのアーティスト写真やジャケット写真を担当。海外のアートフェアでは、自身の写真作品を発表。Twitter : @keita_senoh





やってみたいと
思う衝動を大切に

神村水葉●かみむらみずは
人文学部社会科学科 1 年
ミュージカル劇団アルエット創立・代表者

「たくさんの人の心を動かすことのできるミュージカルを作りたい」。笑顔で目標を語るのは、ミュージカル劇団アルエット創立者の神村さん。舞台関係の仕事をしていた祖母に連れられ、小さいころからミュージカルを観る機会が多かったという。中でも、地元のアマチュア劇団を観ることが多く、アマチュアでも人の心を動かせることに感銘を受けた。それが、自分も作りたい、やってみたいという夢につながる。中学、高校は演劇部に所属。大学生になったことを機に、叶えなかった夢を現実に行うと決めた。

ミュージカル劇団アルエットは、水戸中心に活動する女性アマチュア劇団として創立。サークルとして創立しなかった理由は、サークルだと 2、3 年の活動で終わってしまうから。好きなことが卒業という形で打ち切られるのは悲しいので、気が済むまでやり続けられる場所を作りたいかったという。女性限定にした理由を聞くと、「私が男性役をやりたいからでした」と意気揚々と話してくれた。演劇部に所属していたころ、人数の都合で男性役を何度かやったことがある神村さん。普段の自分とは違

う自分になれる感覚が楽しかった。地元にも女性劇団がいくつかあり、女性が男性役をこなす姿に憧れを抱くようになったのも理由の一つだ。

ミュージカルは、演技だけでなく歌や踊りも用いられる。「セリフを理解できなかったとしても、歌や踊り、一部分だけでも楽しめるところがミュージカルの良さだと思います」。アルエットは、ミュージカル経験者がいないため、歌も踊りも独学だ。これからみんなで探り探り練習、習得していくという。

現在アルエットに所属しているのは神村さん含めて 4 人。不安な点は人が集まらないことだ。しかし、何とかするのはないかという気楽さも持ち合わせている。失敗が成功かはやらないとわからない。行動の前に結果を考えるのは無駄だ。「結果がどうこうよりも『やってみたい』という衝動を大切にしたい」。失敗も経験してきたという彼女だが、失敗に対する恐怖感は今のところないという。

自分の人生を振り返ったときに、やりきったと思えるような生き方を理想とする神村さんは、日々目標に向かって走り続けている。



しごとさを持つ



大槻倫成 ● おおつきみちなり
理学部理学科物理学コース 4 年
茨城大学イスバスサークル設立者・前代表

車椅子バスケットボール、通称イスバス。それは車椅子に乗ってバスケットボールをするスポーツだ。そこに健常者と障害者の区別はなく、みな同じように車椅子に乗る。障害者は世間からマイナスイメージを持たれがちだが、それを覆すほど激しく、迫力がある。そんなイスバスの魅力を伝えたいと思いサークル設立を決意した大槻さん。だがサークルとして活動するまでのその道のりは決して楽なものではなかった。

始まりは、大槻さんが 3 年生のときだった。まずはその存在を知ってもらうため、SNS などを使って広報活動を行った。それだけではなく、周りの友人に直接声をかけて練習に誘った。参加してくれる人は徐々に増えたが、そこに至るまでもに数ヶ月の月日がかかったそうだ。練習に付き合ってくれる人がいなかったときもある。練習が始まるギリギリの時間まで粘るも誰もつかまらない。一人のときでも、変わらずに彼は体育館へ向かっていった。「皆都合が悪くて来れないのはわかっていました。でも本音を言えばすごく寂しかったです」。大槻さんは少し苦笑いをしながらそう言った。

さらに実際にイスバスに触れてもらおうと思い体験会を開いた。自作したチラシを配るも、当日の参加者はゼロ。これまでの活動から自分たちの存在を知られていると思っていたが、そんなことはなかった。そこで現実を突きつけられたそうだ。今だからこそ笑って話せることだが、当時の彼にはつらい出来事だった。

「興味を引くところが一番難しかったです。どうしても車椅子となると『ボランティア』や『補助』というイメージが強いから」。興味がある人はいても体育館まで足を運ぶ人はなかなかいない。当時から今に至るまで、この状況はサークルにおいての課題である。そんな課題はあるが、現在は以前より人が集まり、活動を楽しんでいる。

これまでの道のりは、楽しいことよりも苦しいことが多かった。それでも諦めることなく彼が進み続けたのは、「イスバスの魅力を知ってほしい」という強い思いがあったからだ。現在もサークルは存続し、大槻さんに代わってサークルを運営する後輩もできた。諦めずにここまでたどり着いた彼のしごとさは、きっと新しい代表者に受け継がれているだろう。



外に出ないと 分らないことがある



高橋幸太●たかはしこうた

人文学部社会科学科3年。全国をめぐり鉄道の写真を撮る。撮影した写真は雑誌「RailMagazine」にも掲載されている。田中耕市ゼミ所属。

「もちろん鉄道を撮ることも楽しいですが、鉄道を絡めた人の情景を切り取るのも楽しいですね」そう語る高橋さんは俗に言う撮り鉄だ。幼少期から鉄道が好きで、大学生になってからは、アルバイト代のすべてをつぎ込んで全国を巡り写真を撮っている。

各地を周り地元の人話を聞く中で、自分が抱いていたイメージと地元の人との間に違いがあることを知った。「福島のみ見線に行ってきたんです。絶景が魅力で人気のある路線なのですが、数年前の豪雨の影響で未だに一部区間動いていないんです。地元の人にとっては重要な交通手段、観光資源なので動いていない現状に困っていると思っていたんです。でも、観光客のほかに利用する人も少なくして復旧するとお金もかかるからと復旧を望んでいない人がいたんです」足を運んだからこそ分かったことだった。

大学のゼミで交通機関と人口減少の関係について研究している高橋さんは、赤字が続き路線廃止が危惧されながらも経営が回復した、ひたちなか浜浜鉄道に興味を湧かした。高橋さんは浜浜鉄道の写真を提供することで、市民団体「みなとてつどうおらが浜浜鉄道応援団」の活動に協力している。活動に協力する中で、地元の支援が経営の回復に重要な役

割を果たしていることに気がついた。「他の地域では、その地特有の文化と鉄道事業が別個に盛り上がっているんです。地域と鉄道のつながりが薄いんですね。でも、この地域では「おらが浜浜鉄道応援団」が地域と鉄道の架け橋になっていて、その密接なつながりが経営回復に貢献していると思います」。

高橋さんは地域と鉄道の魅力を多くの人に知ってもらうために写真展を開く準備をしているという。「撮ったものを内に留めておく人もいるけど、それじゃもったいないと思うんです。写真を撮っているからには人に知ってもらいたい。僕の写真を見てその地を訪れる人がいるかもしれないですから」。

高橋さんは、SNS で目にした興味のあるイベントに積極的に関わるようにしている。その中で鉄道職員やプロの写真家と知り合い、穴場の撮影スポットを教えてもらえることがあるという。

Facebook や Twitter といった様々な SNS であふれる現代。興味のある情報を目にする事が多いはずだ。だが、高橋さんのように実際に行動に移す人は多くはないのではないだろうか。興味のあることに実際に触れることで、思いもなかったことに気づくかもしれない。



「型」はひとつじゃない

匿名希望 ● 教育学部 2 年

X ジェンダー（自らの性について男女どちらでもないと感じる人）。茨城大学入学後、茨城大学セクシュアルマイノリティサークル（非公認）を設立。性的少数者のさらなる理解のため、他機関とも連携した活動を行っている。

レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル…。恋愛の形が男女間だけではないというように、性にも多くの形がある。それらを総称して「セクシュアルマイノリティ」と言う。少数派であるだけに、世間に対し肩身の狭さを感じている当事者。往々にして多数派優位の世界に生きている私たちは、そのような人たちの気持ちを考える機会があったらどうか。

彼女は大学入学にあたり、セクシュアルマイノリティの人たちが気軽に集い、語り合うための『茨城大学セクマイサークル』を設立した。

「筑波大学にそういった機関があるのは知っていたのですが、なぜ茨城大学にはないのかなと思って。あとは、純粋に仲間がほしくて設立しました。本当は公式にしたいんです。でも、サークル申請の名簿を出すときにメンバーに対してアウティング（本人の了解を得ずに、公にしている性的指向や性自認等の秘密を暴露する行動）になってしまうので、非公認のまま進まずじまいなんです」。

今や、日本における当事者の割合は 7.6%と言われている。左利きや AB 型と大体同じ数字だ。

「少数派であれども、確かにいる。セクマイの人が一

番つらいのは中学校、高校の学校生活。閉鎖的かつステレオタイプな環境で絶望を味わうわけだから、せめて自由な大学ではそういう人たちが過ごしやすい場を作ることができたらいいと思います」と語る彼女。より多くの人の生活を充実させたいという趣旨は、一般のプロジェクトや活動と何ら変わりはない。

ここまでセクシュアルマイノリティへの支援を堂々と語ってくれた彼女だが、ふとした一言が印象に残っている。「セクマイのことが認知されるのは嬉しいけど、まだこの大学がそういうのを受け入れてくれるか怖い。メディアに載ることで、今後もし『あの人セクマイなんですよ』という目で見られたら怖い。だから、顔無しの匿名でも良いですか」と拒否したことだ。

認知されたい気持ちはあるけど、それと同時に引け目やリスクは大きい。それが、少数派として生きる彼女の本音ではないかと編集者は感じた。

「当事者でなければ気持ちが分からないのは当たり前。完全に分かることはできないけど、分かろうとすることはできる。一般的な性のありかたを認めた上で他の型も認めてほしいというのは、何がいけないというのか。

自分が思う普通だけが全てではない。



他人と違うことを恐れない



「場をわかまえることは大事だけど自分を失くしたくないんです」

周囲の状況を気にするあまり自分を殺してしまうことは誰しもが経験したことがあるだろう。

『出る杭は打たれる』

そのような考えが一般的な中でも自身の行動に一貫性を持って行動しているのが、宇野麗奈さんだ。

人より目立つことが大好きだという宇野さんは、高校生の頃コスプレにのめり込んでいた。コスプレを通して自分を人前にさらけ出すことは宇野さんにとっての喜びの一つだったからだ。

高校時代、月 10 万円のバイト代をすべてコスプレ衣装に充てたこともあり、イベントにも積極的に参加していた。イベントでの交流を通して宇野さんは自信を持つようになり、徐々に行動範囲を拡大していった。

「自分を認めてほしい」

一種の承認欲求から始まった活動は、今では登山やバンジージャンプ、マラソンなど多岐にわたる。毎年恒例となっているバンジージャンプは、テレビ番組の企画に自ら応募したのが始まりだ。人よりも目立ちたいと考えている宇野さんにとって、テレビ中継されていたバンジージャンプは良い機会だった。

「目立ちたくない、動きたくないという考え方はもったいない。自信を持って行動すれば、余裕が生まれます」

自信を持って行動することが成功に繋がるという宇野さん。自分の行動に疑問を覚え、挑戦しなかったばかりに後悔した経験がある人もいるだろう。

「少しくらいナルシストに生きてもいいんじゃない？」そんな後悔をしないように過ごしていくには何が必要なのか。その答えの一つを宇野さんは持っていた。

どのような経験を通して自信を得るかは人によって違う。だが、行動を起こさなければ自信を得ることはできないのも事実だろう。宇野さんの自信には、それを裏付ける経験があったのだから。

宇野麗奈 ● うのれいな

教育学部情報文化課程 1 年。積極的な性格から、多くのイベントに参加している。



自分自身をデザインする

「自分をデザインするのは自分、というのは僕の信念です。いいものを選択して実際に身に着けるといって、自分は自分のバイヤーであって、デザイナーであると思うんです」。

服は、自分を高めてくれる一つのツールであると宇津木さんは語る。よい服を選ぶ理由は、「よりモチベーションを上げる」ため。宇津木さんは、ただ新しいもの、個性的なものを集めるわけではない。「いつもアンテナを張って、自分がいいと思ったものを取り入れる」ようにしている。宇津木さんのファッションへの情熱は、温故知新の精神からもうかがえる。「たとえそれが最新じゃない古い情報であったとしても、自分がいいと思ったものは取り入れたいと思っています。必ずしも新しいものがいいいとは限らないので、いいものを探すために読み古した雑誌のバックナンバーをよく読み返しています。ぱっとみてわかりやすいまとめサイトや無料のファッションアプリもありますが、じっくり読み込める雑誌を選ぶこともこだわりの一つですかね」。

大学に入学し、服好きがきっかけとなって人間関係が広がり、旅行や山登りなど新しい趣味を得ることができたという。

「世界を広げてくれる服に感謝しています」という目は生き生きとしていた。「熱中するものが、熱中するものと呼ぶんです。何かに熱中すれば誰かが必ず自分に気づいてくれる。僕の場合はたまたま服だったけれど、何でもいと思う。そういうものを見つけている人も、そこで終わらずに、ある意味“ミーハー”な精神でいるくらいがいい。わがままでいいんです」大学生の4年間はあつという間ですからね、と付け足す宇津木さん。いいと思ったらすぐに実行してみる。自由な時間を無駄にすることははないという。

情熱をもって貪欲に挑戦する宇津木さんの姿勢は、自分は自分が作るものであるということを感じさせてくれる。

宇津木凱 ● うつぎかい

教育学部情報文化課程3年。高校時代からファッションに目覚め、服に熱中することで自身の世界を広げる。

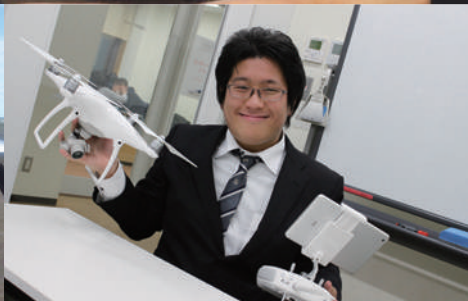


正田真悟 ● しょうだしんご

人文学部社会科学科2年。世界一免許取得が難しいともいわれるホノルル国際空港でパイロット免許取得に成功。現在は航空技術研究会に所属。



夢を叶える勇氣を持つ



「物心つく頃から空にあこがれていて、空を飛ばたいと夢みていました」。そう話すのは、学生でありながらパイロットの免許を取得した正田真悟さん。彼がその夢を叶えるために動き始めたのは高校を卒業する頃。日本でパイロットの免許を取得すると多額の費用が掛かってしまうため、アメリカで取得することになった。

言葉の壁は大きかった。しかし、かねてからの夢を叶えるべく、彼は単身アメリカへ渡る。航空無線でのやり取りや隣に座る教官の指示すらすべて英語で行われ、さらに操縦する機体のマニュアルも全て英語だ。辞書を駆使してそれらに対応することはとても大変だったと思われる。その勉強量の膨大さにくじけそうになったこともあったという。しかしそんな時は、「やりきるまで帰れない」と自分にプレッシャーをかけることで乗りこえたそう。

こうして多くの困難を乗り越え、昨年ついに彼はパイロットの免許を取得した。多くの人が経験することのない濃密な日々を越えて、彼は「自分に大きな自信を持てるようになりましたし、それに、空が今までよりも近くなった

ように感じますね」と語った。

それに加えて、「パイロットの免許を取得していなかったら恐らく、今航空技術研究会でやっている、ドローンによる空撮プロジェクトも実際にやろうとは思わなかったと思います」と彼は言う。夢を叶えることがその後の自分を変えることにもつながるということなのだろう。

一つの大きな夢を叶えた正田さん。彼の新しい目標は、航空系の学校に編入し今度は職業としてのパイロットを目指すことだという。

正田さんに夢を叶えるために必要なことは何ですか、と聞いてみると、「無理だと思っていることや、周りの人が誰も経験していないことにチャレンジする勇氣を持つことです。失敗する未来ではなく成功する未来を頭の中に思い描くことが大切です。やらずに諦めてしまうことが最ももったいないことだと考えています。自分の意志を貫いてまずやってみることが大切です」と教えてくれた。

夢を叶える勇氣を持つことが、その後の人生を変える一歩になるのかもしれない。

☑ よきパートナーを見つけよう

ユリさんとカイさんは、共に理学部の二年生である。入学式前、二人は新入生同士のSNSで知り合った。偶然同じ授業を履修していたこと、長年音楽に傾倒していることが共通して意気投合し、交際を始めることになった。「本当に運が良かったと感じます。出会っていなかったらどうなっていたんだろう。面倒くさがらずに、人と出会える機会があれば会いに行こうと思うようになりました」とユリさんは言う。小さなきっかけを大切にすることが、自分を変えてくれるような存在に出会う可能性を高めるのかもしれない。

自分たちは、お互いを高めあえる大切な存在であるという。「身近な人の活躍は自分も頑張らなきゃという気持ちにさせてくれます。たまたま自分たちは恋人という関係であったけれど、そうでなくてもいいと思います」。興味のある授業があれば、他の学部で授業でも受講するという自主性が高い二人は、教育学部音楽選修の授業も履修した。「自分がやりたいと思ったことはやってみようと思って」とカイさん。来年度、語学を学ぶためのアメリカ留学も計画している。カイさんがアメリカへ渡ることをきっかけに、ユリさんも興味があった留学を決めたそうだ。他人同士から、二人のような相互に高めあうよ

うな存在になるために必要なことは、相手と信頼関係を築くことであるという。「相手を信頼するためには、一緒にいる時間を増やすこと」とカイさんは語る。「相手に心を開いたことによって、人間不信がなくなったし、悩みを一人で溜め込むようなことが少なくなった。考え込まない性格の彼に影響を受けて、楽観的に考えることが出来るようになったと同時に冷静になれたと思います」と、ユリさん。

二人には、長くよい関係を続けるコツがあるという。音楽系サークルに所属しているカイさん。ユリさんは毎回大きな演奏会を終えると、サプライズでケーキを手作りするという。「そばにいたことが当たり前となった今でもサプライズなどをして、毎日の中で新しい刺激が得られるように工夫しています」。お互いにより気持ちで過ごすための工夫が思いやりとなり、信頼関係を強めることに繋がっているのかもしれない。共に高めあうことができるような人を見つけることは、新しい自分に出会うきっかけにもなるのではないだろうか。

ユリ・カイ（仮名）

共に理学部2年でありながら教育学部音楽選修の授業を履修。また、音楽の理解をより深めるため海外への留学を計画している。



「場所やまわりにいる人の変化にかかわらず、一定の成果を上げられる人が少なすぎると思います」。一人では何もできない人、あるいは他人に依存しているがために行動やそれに伴う結果に大きくむらがある人、いわば自分自身の軸を持っていない人が多いのではないかと自身の考えを述べる中村さん。さすが理系と言うべきか、論理的な話し方には説得力があり、聞き手も頷くことが多かった。これは実際に話をしたからこそ分かる魅力であるが、そうでない人にとってまず目を引かれるのは彼女の容姿だろう。白い肌はもとより、薄い色の髪も生来のものである。中村さんは『アルビノ』として生まれたのだった。

アルビノ（アルビニズム）とは先天的に色素が少ない遺伝子疾患であり、皮膚や髪色、瞳の色に特徴があるほか、視力が低い、まぶしい光が苦手である、日焼けをしやすい、というのが一般的な症状だ。社会的な認知度が低いこと、症状の程度には個人差があることから他人、特に学校への説明が不可欠だった。小学校の頃は保護者の方が学校へ連絡していたが、教育段階が進むにつれて自分で説明することが多くなっていったという。「『これができますこれができません』ということをはっきり言わなきゃいけません。アルビノは個人差が大きいから、自分がどういう状況かを理解して説明しなければいけないんです」。そのためには自分と向き合うことが必要ということですか、というこちらの問いかけに、彼女は深く頷いた。

折に触れて体質以外の出来ること、出来ないことについても考えることがあるという。自分が出来ることをどのように研究に生かすのか、将来生活していくためにどのような方向性を選ぶのか。自らの可能・不可能を中心にすえた自己分析にもとづいた基準が、中村さんの行動の礎だそう。アルビノとして生まれ、他の人よりも自分について考える必要があったからこそ、自分の軸を持つに至ったのかもしれない。

今号では積極的な茨大生が数多く掲載されている。しかし自分の軸を持っていないような人々が、彼らの行動面のみに注目し、ただ闇雲に活動したところで得られるものはいったい何だろうか。中村さんの語りから外に出るだけでなく、己と向き合うことの大切さが伝わってくる。





中村優奈●なかむらゆうな
理学部理学科生物科学コース3年。色素が少ない遺伝
子疾患『アルビノ』として生まれる



己と向き合う



2 年次から メディア ブラックゼミ！？

●村上ゼミの基本データ

- ・「メディアと社会の関係」を研究
- ・ゼミは2～4年合同
- ・活動日は火曜4・5時限

飲み会に台本

●村上信夫教授

人文学部人文コミュニケーション学科
メディア文化コース
教授兼現役放送作家

Q 村上先生のゼミはブラックゼミという噂がありますが、本当ですか。

忙しいのは認めるけど、ゼミ生が自分たちでプロジェクトを次々企画しているからともいえます。言い出しっぺがプロデューサー（後述）になり、プロジェクトを動かしています。でもまあ、いつのまにか学部一厳しいゼミ、ブラックと紙一重とか言われてるよね（笑）でも、東京の私大の学生は、こんなもんじゃないよ。

Q 村上ゼミの学生は積極的な方が多いようですが、ゼミの中で積極性を上げるためにしていることはありますか。

プロデューサーシステムです。「これをやりたい」と提案した人がプロデューサーとなって企画書を書き、プロジェクトを最後までやってもらいます。最後までやり抜くことで初めて力になるので。研究、他大学との交流、遊びとプロジェクトはいっぱい。例えば、月1回のゼミコンパは幹事がプロデューサーとなって、コンセプトから店選び、台本を作り、当日の演出までやります。

Q 飲み会に企画書とか台本ってすごいですね。

テレビとか映画の業界でもあることで、割と若い演出希望の人に飲み会の仕切りをやらせるんだよ。予算を考えて、どうやって人を集めて、どうやって楽しませるか。それは割とシンプルなエンタメの基本で、反応が出てくる。これが下手なやつで、演出家やプロデューサーになったやつはいないからね。

あと普通の大人の社会でも、宴会なんかで準備頼まれたら大きな仕事を頼みたいっていう証だって。やり抜くというのは力になる。**案を出して、形にして、自分で実現して、みんなに褒められたりする。そういった小さな成功から自信を持ち、力がつく。**僕はそう思っているの。



Q 2年の後期からゼミが始まる意図は

メディア文化コースは2年後期10月にゼミが決まる（人文学部の中でも一番早い）。茨大の中になると気づかないかもしれないが、3年4月から就活は始まっている。そうすると3年生になってからゼミに入っているのは遅いんだよ。これじゃあまり意味がない。茨大には積極的に欠ける学生が多いかもしれない。本当は能力が違わないのに、就職で負けてしまう人がいるのはそういうことだろうね。よって、積極性を養ったり、就活で全国に通用する力をつけたりするために、2年の後期からゼミが始まるわけです。

Q ゼミの中で学生へ求めることはありますか。

まあ、スピードでしょうね。茨大生って茨城のスピードで生きているけど、それが世間一般で通じないことがある。就活の時なんか明らかに遅いよね。残念ながら茨城は全国で一番速い東京に近いから、そのスピードを意識しなければいけない。村上ゼミと兄弟のような関係の立教大学砂川ゼミの教で「質問は手を挙げてから考えろ」ってのがある。半分洒落だろうけど、大勢の中で目にとめてもらうには考えてから手を挙げていてはだめ。それくらいの覚悟じゃないと瞬発力は身につかないよね。

Q 茨城大学の学生に向けてお言葉ををお願いします。

茨城大学というスペックを嘆いても仕方ないと思うんですよ。自分が何かをしようとするなら、そのスペックを受け入れた上で自分が戦って勝つしかない。今の手持ちのカードで最高の勝負をしなければならない。あと茨大生は口に出しておいて失敗したら格好悪いから言わない。それってもったいないですよ。言えば誰かが手を差し伸べることもある。言った奴には情報が集まってくる。だからこれやりたいって口に出せばいいんですよ。だからうちのゼミではやりたいことをみんなの前で言わせています。夢は見るものではなく叶えるものです。

●ゼミ生の声

私は小学生の頃からテレビ局で働くのを夢見ていました。だから、様々なマスコミ系の企業見学ができたり、メディア界の方による講演会に参加できたりするこの村上ゼミに入ることに決めました。正直最初は怖かったです。先輩方はもちろん、周りの同期のみんなもとても意識が高く、ついていけるか不安でした。しかし実際には、ゼミの活動はとてもアットホームな雰囲気、居心地がよかったです。もちろん、やるときはやる。でも、面白いことがあればみんなで大爆笑しますし、飲み会では先生もゼミ生もみんなで大盛り上がりです。このオン・オフの切り替えこそが村上ゼミの魅力だと思います。一生懸命やるべきことをやったからこそ、オフの部分で思いっきり楽しむことができるのです。そんな、夢に1番近いゼミこと村上ゼミで、夢を叶えてみませんか？（2年 大川美波）

セルフカスタムのドリフト車



工学部理工学研究科
機械工学専攻 2年

はなわあきひろ

塙 彰弘さん

以前は日産・シルビアでドリフトをしていたが、人づてにマツダ・RX-7を手に入れた。走れる状態ではなかったが、ハンドルを握った瞬間「この車だ!」と感じたという。

幼少期に地元の販売店で目にしてからこの車に憧れてきた塙さん。シルビアから新たに譲り受けたRX-7に乗り換えドリフトを続けた。学科で培った技術を活かし車体の修理から走行性能の調節、さらにはエンジンの性能向上のために海外から部品を調達しており、全て自身で調節している。

「ドリフトの大会では相手に喰いかかる気で攻めています」その強気な姿勢の表れか、車の左側面は何回も修理されており給油口の蓋は無い状態だ。

また、87WORKS という名で同僚の車のメンテナンスや自身で加工した部品を売ったりしている。

「4月から社会人なのでローンが組めるようになります。今まで以上にお金も時間もかけられて、この車に向き合えるので楽しみです」



マツダ・RX-7。車体は所属しているドリフトチームのチームカラーの赤で染め上げられている。

今回は車特集！免許を取得し始める大学生必見です。
自分の車にこだわりを持つお二人にお話を聞かせていただきました。

自動車部員でも知る人の少ない希少な車

泰山さんがランティスと出会ったのは3歳のとき。「グランツーリスモ」というゲームの中でこの車を見つけた。その後、小学校高学年の頃から好きになり始めたという。

「自分以外に乗っている人を見たことがないので、唯一の車に乗っているような満足感があります」と語る泰山さん。なぜランティスがそんなに希少な車になってしまったのか。理由は、そのデザインにある。その特異なデザインは当時の人々の感覚には合わなかったため、ほとんど売れることはなく、個体数も激減してしまった。その結果、現在日本に存在するのは、1,000台程度だ。

泰山さんにランティスの好きなところを聞くと、「外見、エンジン、足回り、売れなかった経緯も全て好きです」と笑顔で返してくれた。

彼のランティス愛は、「たとえエンジンがぶっ壊れても、修理に100万くらいかかっても、直して乗ると思います」という言葉から強く伝わってくる。



農学部生物生産科学科 2年

まつやま なおき
泰山 直樹さん



ランティス 2000TypeR。バブル期に設計された。車内は意外と広く、4人乗っても快適。

Life Place

【寮生活】

水哉寮 1 階在住

理学部 4 年 岡田唯登さん



Q 寮生活を決めた理由は何ですか？

両親の収入が少なく仕送りが期待できないため、アパートに比べ安価な寮を選択した。水哉寮は昔 4 人部屋であったが、そのままであれば入寮はしなかったであろう。1 人部屋というのも大きな決め手となった。

Q 寮ならではの楽しさは何ですか？

アパートと違ってご近所さんが皆知り合いであるため、食事や遊びに誘いやすい。また、部屋が近いので遅くまで友達との部屋で談笑できる。大浴場に皆で入るのも良い。

Q 寮にはどんな人がいますか？

真夏にコートを着て廊下を徘徊する者、突然奇声を上げる者などがいるが、ごく一部である。6 割くらいは普通の人。多分。学部の違いについて、私の住む 1 階は引越しのしやすさから工学部、農学部の 1 年生が多い。他の階は特に偏りが無いと思われる。

Q 棒祭りというイベントがあるようですが、どのようなものなのでしょうか？

11 月 11 日、通称棒の日にうまい棒を買い占め、寮生で食べるという祭り。昨年は 300 本購入した。1 階で開催されるイベントだが、昨年は参加者が少なかったため、会場前を通った人みんなに配布した。

Q 棒祭りの主催者と聞きましたが、開催したきっかけは何ですか？また、何故うまい棒にしたのですか？

1 年生の時の棒の日に、先輩から「ポッキーを買い占めて来い！」と言われたが、うまい棒も同じ棒だよなと思い、スーパーで約 100 本ものうまい棒を購入したことがこの始まり。ポッキーは世間が棒の日にポッキーの日といって騒ぎ立てる。注目されないうまい棒だが、一本一本が太く、量があると結構な迫力になる。そんなうまい棒にスポットライトを当てたかった。

岡田さんの一ヶ月の生活費（収支）

収入	
仕送り	0 円
奨学金	50,000 円
アルバイト	40,000 円
合計	90,000 円
支出	
寮費（光熱費含む）	16,800 円
食費	20,000 円
娯楽	20,000 円
その他	20,000 円
合計	76,800 円



寮のイベント・ピックアップ

4月 新歓祭

一年生を歓迎する行事。1階では、新しく寮に入った新入生に新2年生があだ名をつける。楽しく一緒に食事をしながら、新入生同士も交流を深めあう行事である。

11月11日 棒祭り

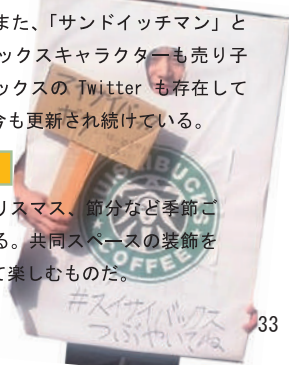
一昨年から1階のイベントとして始まったもので、例年100本ほどのうまい棒を買って寮生で食べるという行事だ。棒祭り後の感想は「うまい棒は次の棒祭りまで食べなくていい」と口をそろえて言うという。

11月 茨苑祭

茨苑祭に2016年度から出店。「スイサイボックス」という名で、ハムチーズ、フルーツサンドを販売。なおコーヒーは販売していない。また、「サンドイッチマン」という愛称の、スイサイボックスキャラクターも売り子として誕生。スイサイボックスのTwitterも存在していて、茨苑祭が終わった今も更新され続けている。

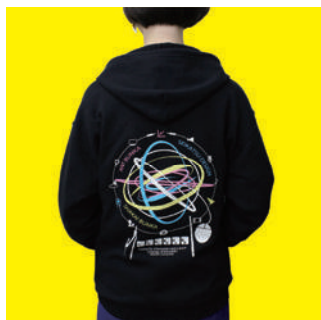
季節ごとのイベント

2階ではハロウィンやクリスマス、節分など季節ごとのイベントが盛んである。共同スペースの装飾をしたり、仮装をしたりして楽しむものだ。



Fashion

hooded sweatshirt collection



教育学部情報文化課程
農プロ
トレッキング同好会

茨苑祭実行委員会
演劇研究会
Gitarre!!

理学部某研究室
教育学部数学専修
教育学部技術専修



放送研究会
教育学部国語専修
教育学部特別支援

テニス同好会
教育学部教育基礎
GI

教育学部国語専修
富次郎
C-mail

今日なに食べる？

いばだいめし

#3 茨苑食堂

茨大生の食に関するアレコレを紹介する「いばだいめし」。第3回目は、水戸キャンパス内の「茨苑食堂」のメニューの中でも、特に人気のある5品を紹介していきたいと思います！

●クレープ 280円

生クリームたっぷりのスイーツクレープからカツ入りのご飯クレープまで、幅広い品揃えが魅力です！



●うまたま丼 395円

聞きなれない商品名でありながら、多くの学生を虜にしてきた「うま玉丼」。そのコスパのよさは茨苑食堂のメニューの中でも五本の指に入るのではないのでしょうか。



●から揚げ定食 495円

人気ナンバーワンの「から揚げ定食」！塩味のから揚げはポリュミーでからっと揚げられており、かなりのリピート率だそうです。



●味噌ラーメン 399円

麺類一番人気は「味噌ラーメン」。麺は生麺でスープは骨からダシを取っています。チャーシューも自家製と、手作りにこだわった一品。



●から揚げカレー 435円

大人気のから揚げがごろっと入った「から揚げカレー」。定食に比べて食べやすい量なので、茨苑食堂ビギナーにもおすすめです。

学生支援課からのお知らせ

主に新入生の皆さん！大学生活の中で困ったことはありませんか？茨城大学の中には皆さんの悩みに合わせた相談窓口があります。迷ったら、まず相談しよう！

相談内容	窓口の連絡先	
基盤教育や全学共通プログラムの履修等	共通教育センター ①	029-228-8415・8416
証明書・学割発行等		029-228-8065・8414
学生寮・課外活動	学生支援センター ②	029-228-8055
授業料免除		029-228-8067
奨学金		029-228-8059
就職相談・インターンシップ等	キャリアセンター ③	029-228-8797
留学支援・留学生奨学金	グローバル教育センター ④	029-228-8056
心身の健康や修学・学生生活上の不安や悩み等の受付窓口	茨大なんでも相談室 ⑤	029-228-8595・5410
障害のある学生からの学生生活及び修学相談	バリアフリー推進室 ⑥	029-228-8499

共通教育棟 1号館 (1階)



充実した学生生活を！

編集後記

C-mail 217号、読んでいただきありがとうございました！

取材・編集にご協力いただいたすべての皆様に感謝申し上げます。

巻中の学部・学科・学年は取材時のものです。 教員編集員●塚原伸治／上栗伸一／木村真琴／海野昌喜／豊田淳

【編集長】



あなたにキャッチコピーはありますか

「集団でいる方が安心できて、飛びぬけたことはしたくない。これが、僕が持っている茨大生のイメージ」過去の取材でそう言われたことが、私がこの企画を考えたまっかけです。水戸市よりずっと田舎の集落から茨城大学に来た私は、「崖はないしコンビニもパスもあるし道も平ら。なんて都会なんだろう!」と感動しました。しかし、実際にこの大学の人たちが言うのは「茨大なんて田舎じゃん」。大学周辺のインフラには感動したのに、この言葉にも不思議と納得してしまいました。あんなに都会と思っていたのになぜだろう？

この原因を考えたときに冒頭の言葉を思い出しました。バスやコンビニの有無だけが「田舎」の基準ではありません。インフラよりずっと大きいその「田舎感」の正体は、人の目を気にして多数派でいることに安堵してしまう閉鎖的な「人」の存在なのではないでしょうか。

そこで今回提案したのが「人」を意識した特集です。誌面ではその人の芯や内面に着目していますが、特殊な経歴の人、社会的少数者、挑戦する人…田舎社会ではなぜか悪目立ちしてしまうような人を集めています。「人の目を気にしてしまう」そんな読者層を想定して作った217号。自分が思う「普通」だけが正しいわけではない、企画を通して自分はどう生きていのか考えてほしい…言いたいことは色々ありますが、一番言いたいのは茨城大学の田舎感を嘆くのなら、まわりに流されない自分の芯。言葉に出して言えますか？



檜山加奈
教育・情文2年



森川 周

人文・社会2年

人生において最も重要なものは自信です。あなたに自信はありますか？僕はあります。

川又花奈

教育・情文2年

「自分」というテーマは、ずっと考えていくもの。私はどんな人なんだろうなあ。



外間花怜

人文・人コミ3年

私にとっておそらく最後のC-mail、読んでくれてありがとうございました！愚直に生きていきます！！！！

竹河夏奈子

人文・社会3年

入試の日、もう水戸に来ることはないかもなーと思っていたのに、気がついたら3年目が終わりそうです。





八木隆太
理・生物4年

編入で茨大に入学して早2年、短い時間ながらも本当に多くの経験をさせていただきました。関わったすべての方々に感謝申し上げます。

岩澤秀樹
人文・社会1年

今この瞬間を、もう少し味わっていたい。



高澤真悠
人文・社会1年

最近他人の人生をちょっとずつわけてもらいながら生きていくという気がします。

荒井優花
教育・情文1年

暇な時間、不毛な時間が嫌いです。「思い立ったら即行動」。これからも充実した日々を送りたい！



佐藤夢加
人文・人コミ1年

犬に吠えられるのが嫌いです。何が言いたいのか分からないのがもどかしい。言葉は人間の宝。気持ちはちゃんと伝えましょう！

杉内裕介
人文・人コミ1年

C-mail 室寒すぎうち
C-mail 室寒すぎうち
C-mail 室寒すぎうち



富田健太郎
工・機械工1年

「わり算がパッとわりきれお年玉」小川誠司くん 11歳の作品です。この俳句と載せた意味、分かりますよね？

久野明有実
人文・社会1年

え～働かないと掛けまして、RAPと説きやす
どちらも浮浪（FLOW）が付き物です。



長永勇太
人文・社会1年

そうだ、五浦、行こう。

足立晶
人文・人コミ1年

「料理は見たり想像するだけじゃ味がわからない。食べてみれば良いだけ」ってトルコ人が教えてくれました。感動



C-mailとは？

- ☐ Campus mail の略で、学生が企画・取材・編集を行う広報誌です。
- ☐ 専門的な知識は不要！編集員もほとんど未経験者でした。
- ☐ 写真や文章が好きな人、デザインや取材を学びたい人、大歓迎！
- ☐ 雑誌編集に興味のある方は、下記のメールアドレスからご連絡ください。

✉ c_mail_ibadai@yahoo.co.jp

🐦 @c_mail_ibadai

↓ C-mail1217号の感想を
お寄せください。編集員
が喜びます

